近世禅宗寺院本堂の研究（その1）

恵日寺本堂

岡野　清

STUDY OF MAIN HALL IN ZEN SECT IN EDO PERIOD (PART I)

Kiyoshi OKANO

恵日寺本堂　西島町下山4902

創立沿革

この寺の現本堂は17世記後半項の建立と推定出来る。創立についての記録は，日本洞上聯燈録巻第四（曹洞宗全書史伝）尾州雲興寺天先祖命禅師の条に

文安甲子應二祖父江氏之請一開二慧日寺一為二第一世一。

丁卯春留二鑑翁一住二持　慧日一。回二雲興寺一四庵養老。

とあり文安元年（1444）に当る。また，「慧日祠堂過去霊会日鑑」には建立のことを記して

当寺建立明応九庚申（1500）十月七日立柱同十年六月下旬尽造畢　宝暦拾四甲申迄二百六十五年

と記されてある。また　尾州中嶋郡覚書帳，「寛文村々覚書」には

一，禅宗　下津村正眼寺未寺　霊島山恵日寺，寺内二反一畝二十八歩　備前検除

とあって　寛文項には既に寺の存在したことを知る。

尾張徇行記には

此寺ハ永享年中正眼寺三代天先和尚草創ニテ開基ハ当村先城主祖父江五郎左エ門ナリ享保年中正眼寺廿七代布皓和尚法地再興ス此寺昔時ハ今所ヨリ二町ホド東南ノ方ニアリシガ元文二辰年（1736）今ノ地ヘ引移セリ

永享年中（1429—1440）は先の文安元年（1444）よりわずか先になるが，ほゞ同時期である。又，現堂の来迎壁裏には，「明和二乙酉九月望日（1765）」の墨書があるが，来迎柱が出来たのはその木鼻の絵様から見ても，建立時の絵様より多少下ると思われるので，現堂の建立は明和より溯り，絵様様式から推して18世紀前半項と思われる。尚中奥の間と中の間との境にある獅子が描かれた板欄間の裏の墨書に

当邑隣邑有縁之依法謝新造　宝暦拾弐壬午仲春望日，霊島山慧日禅寺現住俊巌代　化僧萬崖　俊嶠

とあり，先の来迎柱と前後して新造されている。

規模，構造と復原

桁行実長6間半，梁間実長5間，寄棟造桟瓦葺の前に見付実長2間半の向拝をつけた堂であるが（写真1），正側3面に付された半間の縁は後世の付加で，元は縁を用いず，正面中央部分（実長3間）と広縁の妻，下奥の

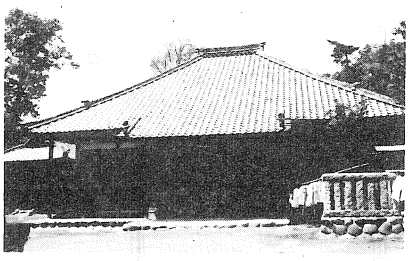

写真1　全　　景

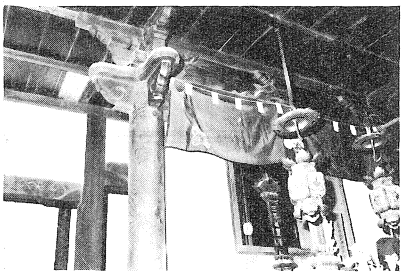

写真2　来迎柱上部

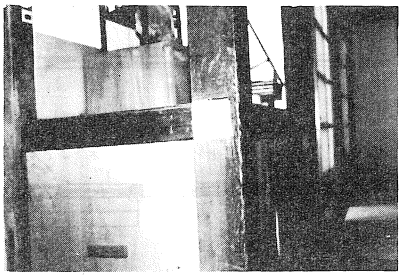

写真3　脇仏壇柱に残る痕跡

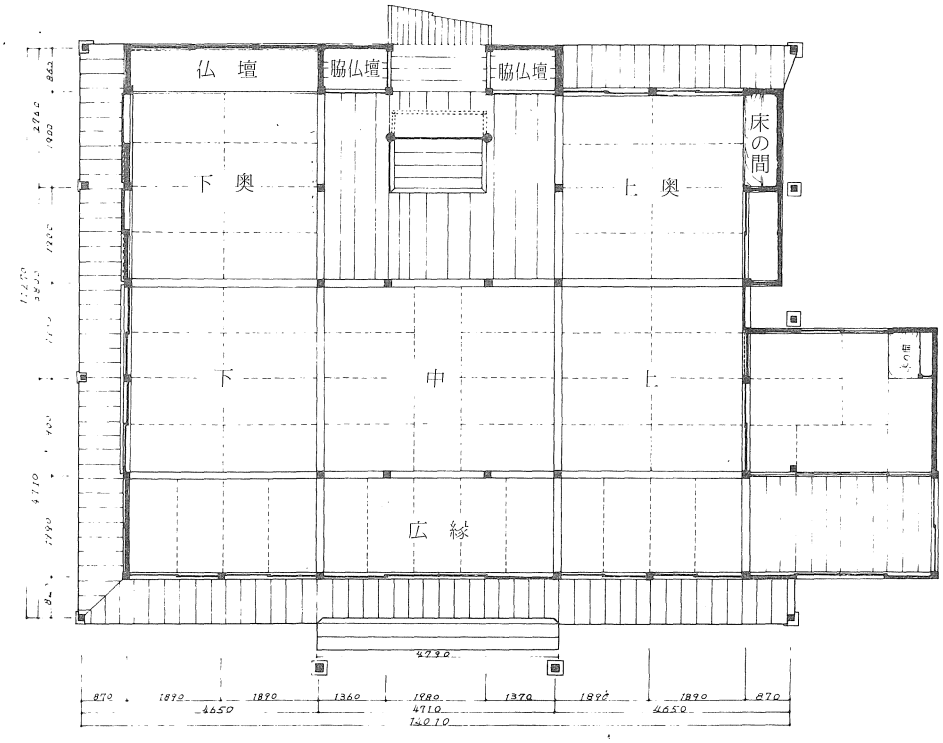

図1　恵日寺本堂現状平面図

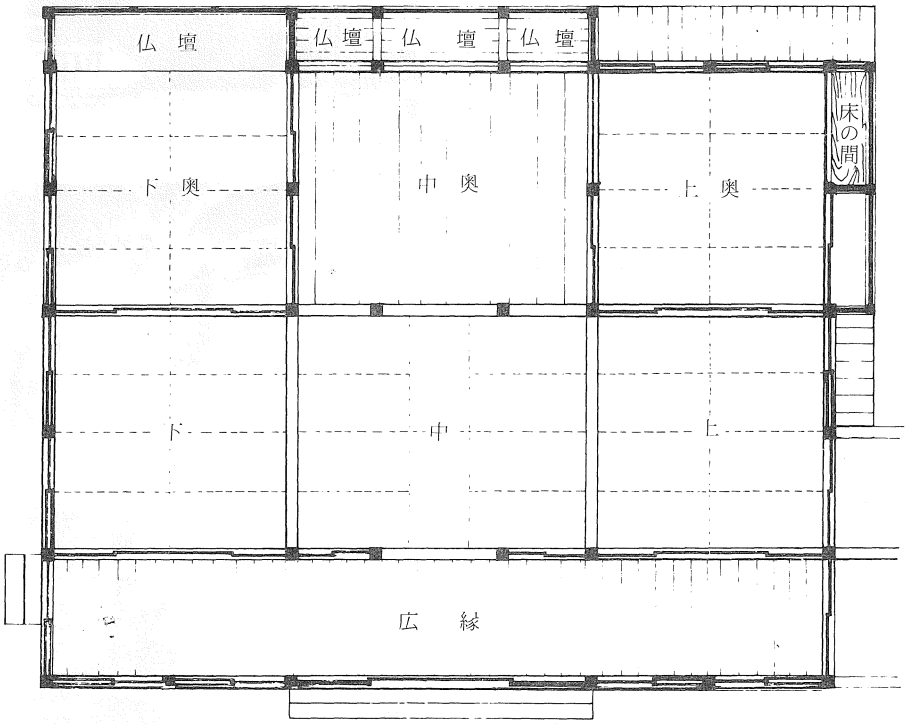

図2　恵日寺本堂復原平面図

西側面と背面を除き，中敷居を入れて，その下を下見張として，直接外へは出入出来ない方式をとり，向拝もなかったことが現在の縁下の風蝕や向拝部の材や絵様によってわかる。現在の向拝柱は全くの新材で，虹梁，木鼻はあるが斗栱はなく，態をなしてはいない。

来迎柱は中奥の間の簡素な棹縁天井の棹に後の仕事らしく取り付けられ，円柱上部に綜付，頭貫，木鼻，台輪，出三斗斗栱実肘木つきで，中備に蟇股人りの型の如きものであるが，天井と比べて木肌が新しく，絵様の様式からしても，明和の補造と考えられる。（写真２）その際，背面の脇仏壇通りの中央間が仏壇となっていたのを，後壁を抜き，今は背面に新設された位牌堂に通じている。背面壁の貫跡及び仏壇の前框仕口跡があり（写真３），上部虹梁の絵様は中奥間前面中央のものと全く同じであり，元はこの取外された仏壇が中央にあり，後門はなかったことが知られるので，現来迎壁にある「明和二乙酉九月望日」の墨書通り，来迎柱及び現須弥壇はこの時の後補と考えてよい。

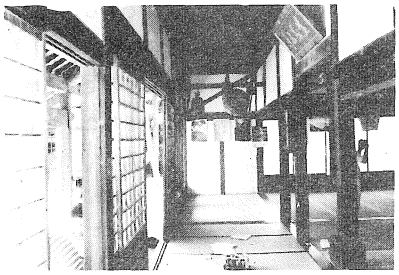

写真４　広　　縁

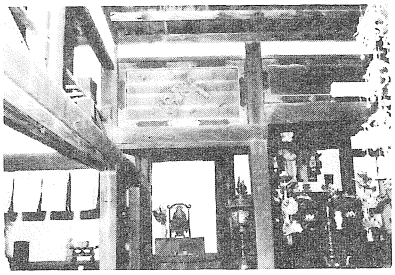

写真５　中の間より中奥の間をみる

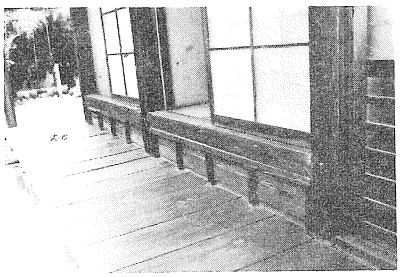

写真６　正面の左脇窓下見，縁側は後補

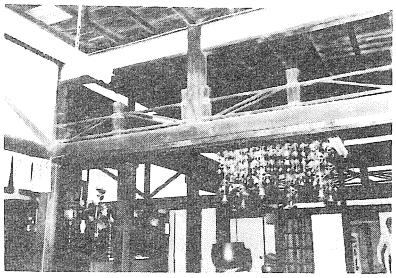

写真７　下の間から中の間をみる

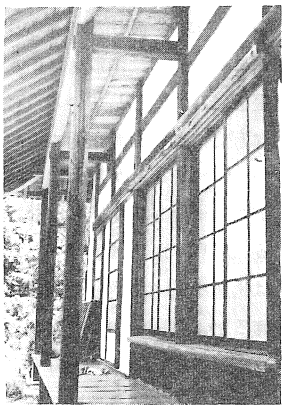

写真８　西　　側　　面

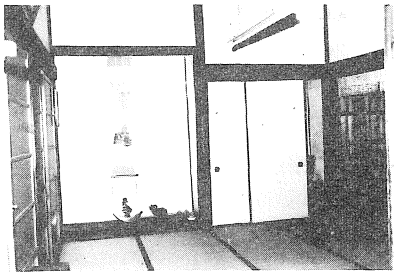

写真９　上奥東側，床と押入

尚下奥の間の西側面２間は現在片袖引込戸になっているが，鴨居溝が３本あるところから元は戸２本内障子１本の戸締りであったし，　上奥の間の背面も同様な旧形式を採っていたことがわかる。又現在は２本溝の敷鴨居となっている中奥と上奥の間境の奥１間は壁が取付いていた釘跡があるところから，床の対面として落付きを求めて仕切ったものであろう。

復原すると以上のようであるが，本堂は前面一間を広縁とし，中の間は間口２間半，上下間は間口各２間，前後室とも梁行各２間の６室で構成され，禅宗の方丈形式をよく表わしており（図２），その手法も中の間や，中奥間の中央間の内法を高くして（写真４）前者では単なる角材を，後者では虹梁を入れ（写真５），仏壇の前に虹梁を入れる他は全て面取角柱に敷鴨居を入れ，内法長押を

通して，内法上を壁とする簡素な形式をとっている。

古式な一般的な禅宗方丈と異なる点を挙げれば，古式な方丈では広縁外を全て開放し，柱間隔を広くとって巨大な桁を通すのであるが，ここでは広縁外側正面中央２間半に巨大な差鴨居を内法を高めて通し（写真４）３本溝の敷居鴨居にしていて，元来戸４，障子２で戸締りし，出入口として，その外に木階を設けたものと思われる。又広縁の両妻は一方は庫裡への渡廊下として引違い戸を入れ，他方も出入口として，３本滞の敷鴨居に戸２障子１を入れて戸締りし，地盤との間に木階を設けたであろう。しかし正面の両脇では１間毎に柱を立て，中敷居に差鴨居を入れ，中敷居下は下見張板にして閉鎖している（写真６）。従って広縁の開放的な方丈では中の間正面中央間に扉をつけて戸締りするのが一般的であるが，本堂ではそこを開放のままとし，上下間の正面も２間持ちはなしにして障子を４枚建てにする（写真４）。

上，中，下の３室の境では鴨居を釣束で釣って，内法長押を通し，上に竹の節を飾るが，釣束を用いたため，上部天井下に狭い小壁を入れて，３室を通じて天井を通さない（写真７）。大仙院方丈などは，ここを小壁で区切っており，それより少し新しい方丈ではこの部分に釣束を用いないで，天井を３室１つに通している。

上の間の東側面２間のうち，手前１間は敷鴨居が２本溝になっていて，渡廊下に接した室に通じていたのであろうが（現在はその部分が改造されている），その奥の１間は３本溝になっているので，外に縁を設け，戸２障子１で戸締りしたと見られる（図２）。下の間の側面は中鴨居を入れて，その下を下見張りとし，３本溝にして戸２，障子１で戸締りしていたことが知られる（写真８）

中奥の間の前面は中央間には内法を高めて虹梁を入れ面脇では敷鴨居に内法長押を入れて各上部に板欄間を入れているが（写真５），元は中央間に筬欄間のようなものを入れ，両脇を壁にしていたかと思われる。

上奥の側面には浅い床と浅い押入れを設け（写真９），背面は１間毎に柱を立てて３本溝で戸２障子１の戸締りをしたので，外には元々縁があった。

結　び

この本堂のように周囲の大部分に中敷居を入れて，閉鎖的にした例は先号にあげた寛永年間創立の尾張旭市の良福寺本堂にも見られたものであるが，本堂では来迎壁がなかったのにかかわらず，仏壇を背面の下屋に出して，中奥の仏壇前を広くとっている点が特異である。古い形式では仏壇を一間前に出して，その背後に眠蔵を設けたのであるが，ここでは眠蔵を造らなかったので，仏壇前を広くして，中の室で営む法事を中奥に持ちこんだものと考えられる。